

知多半島は濃尾平野から南へ突き出した半島で、西海岸を伊勢湾、東海岸を三河湾に囲まれた自然が豊かな場所にあります。伊勢湾に面した沿岸部は、名古屋市の南から、美浜町富具崎まで続く豊かな漁場が広がっていました。そのため、網を用いた漁法やタコツボ漁、貝や海藻を育てて収穫する養殖業などの沿岸漁業が盛んです。また、地域によって様々な漁法や道具があり、季節によっても獲ることのできる魚が異なります。

伊勢湾における漁業の始まりは縄文時代にまでさかのぼります。知多半島で発見された遺跡からは、網の錘に使われた石錘やシカの角を削ってつくられたヤスや釣針などの道具が出土しています。また、貝塚遺跡からは様々な種類の貝や魚骨、ウミガメの骨なども発見されています。

古代になると、知多半島の海岸から多くの製塩土器が発見されています。平城京で出土した木簡には塩のほか、佐米・赤魚・宇波加・須々岐の文字が確認されており、豊富な海産物が都に届けられていたと考えられます。

中世になると、知多半島全域で窯業生産が活発になります。窯跡からは漁網に用いられたと考えられる大小の陶錘が多数発見されています。このことから網を用いた漁法が盛んであったことが想像されます。

近世は漁法や漁撈具が大きく変わった時代です。尾張藩によって編さんされた『張州雑志』には、クジラ漁やサメ漁に関する内容が絵図とともに紹介されています。また、網を使った漁法も地引網・あぐり網・簀立網・こつくり網・ぶり網など多様であったことがわかっています。

近代以降になると、常滑地域では船を使った打瀬網漁が中心になりました。打瀬網漁は家族を中心に数人で船をあやつるため、風を計算した熟練の操縦技術を要します。また、獲物の対象によって海の深さが異なるため、網が同じ深さになるように船を運ばなければなりません。刺し網(流し網)漁も盛んで、近年まで大量のエビが獲れました。タコはやきものを使った仕掛け漁が主流で、様々な形状のタコツボがあります。この地域ではクルマエビ、カレイ、アナゴ(メジロ)、アイナメ、タコ、カニ、シヤコなども獲れ、魚の味も良い恵まれた漁場でした。近年は、環境汚染や潮目の変化によって、漁獲量も減少傾向が続いており、海をとりまく状況は深刻です。今回の展示を通じて、豊かな自然を守っていくきっかけになれば幸いです。



海の道具

うみ どうぐ

とこなめ陶の森資料館 企画展

Fisherman's Tool



タコ釣の仕掛け (昭和時代)



キット碇 (昭和時代)

2022年
6月18日(土)
-7月24日(日)
9:00~17:00

石でできたオモリです。平たい石の両端を打ち欠いてヒモを結びつけて使います。



石錘 (篠島神戸 52 番地遺跡：縄文時代後期)



モリ (昭和時代)

網のオモリです。ちくわのように穴があいていて、ヒモを通して使います。



陶錘 (鎗場御林 B 古窯：鎌倉時代)

近代につくられた陶製のオモリです。網に合わせて様々な重さのものがああります。



陶錘見本 (大正～昭和時代初期)

塩をつくる道具です。本当はワイングラスのような形をしています。発掘では脚部ばかり見つかります。



製塩土器 (狐塚遺跡：古代)

タコツボは、ツボの形をしたもの、改良されたものなど色々あります。



タコツボ (昭和時代)



改良型タコツボ (昭和時代)



改良型ツリガネタコツボ (昭和時代)



羅針盤 (昭和時代)

昔は海苔を育てるための棒を立てる際、海苔下駄を使って遠浅の海に入りました。



海苔下駄 (昭和時代)

ガラスでできた浮玉です。上手にナワでしばって割れないようにしています。



ガラスの浮玉 (昭和時代)



双眼鏡 (昭和時代)

船で魚や貝の網を巻き上げる時に使う道具です。



ポロッコ (昭和時代)

冬の寒い時に手をあたためるのに使いました。船の上で使うため、倒れにくい形になっています。



手あぶり (昭和時代)

港に戻ってきた時に船が流されないようにするための道具です。



碇 (昭和時代)

Fisherman's Tool